

山形大学附属博物館報 9

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

1982 7. 1

目次

博物館指定30周年にあたって	(1)
博物館あれこれ	(2)
熱帯アジアの博物館	(2)
田川隴石・飽海隴石	(4)
資料紹介—佐藤祐堂書 漢詩	(5)
お知らせ	(6)

博物館指定30周年にあたって

館長 川 副 武 胤

この館報の8号(前号)に土屋教授、後藤助教授、伊藤助教授の寄せられた文をよむと、私は当事者として身の引きまじる思いがする。

この地球上の、各分野毎の、或は総合的な巨大な博物館の数々。自分の建物ももたない間借博物館から、土屋教授の紹介された世界の博物館を望見すると“望蜀の念”とはよくいったものだと思う。また本学の研究・教育の歴史の証言者たれとの提言をよむと、これまたスペースの関係もあって、学内の学術資料の集積、保管さえままならぬ本館の現状に切歯の思いを禁じ得ない。また、単独で価値の高い資料や、珍奇な資料のみが尊重されるべきではない。個から群へ、珍奇から普遍へ、という主張から、私は本博物館が近世文書など僅かな突出部分を除いて、一体どの程度この要請に答えているかと、赤面の想いである。

本館が昭和27年に博物館法によるその相当施設として指定されて既に30年、本年の特別展も公開講座も、これを記念して“博物館に学ぶ”と題して、目下準備中である。しかし昭和27年以前に本館には立派な前史があった。否、その蒐集と管理・利用の長い蓄積があったからこそ、はじめて博物館相当施設指定の成果をあげ得たのである。その“前史”の期間は優にその後の30年に匹敵する期間である。

こうして本博物館が本学の前身諸学校(山形師範学校、山形高等学校、米沢高等工業学校など)時代にその胎動をはじめてから、60年の歴史を閲歴した。そしていま、本館は歴史の転換点に立っている。専有面積も僅か367㎡、専任職員ゼロという惨状ながら、その蒐集の質と、利用者及活動の質の高さは、全国大学に先駆けているも

のと自負しているが、時代は進み、状況は刻々変化している。本学が新制の総合大学として発足してからでもすでに30余年、学術資料の集積は恐らく莫大なものがあり、狭いキャンパス内の狭い研究室から溢れ出ようとしている。その研究と教育の“証言者”達は空しく粗大ゴミ・塵芥となって“廃棄”されてしまうのであろうか。遠く数千年前の土器、石器は勿論、近々百年前の反故類は、いまでは史学の貴重な史料である。技術革新と高度経済成長の結果、弊履の如く——その江戸時代の“弊履”が本館の誇る日本一の蒐集品である。——日常茶飯に捨て去られ、消えて行く、時代の、生活(風俗)や政治・経済・宗教・思想・学芸・技術の証言者達のいかに多いことか。いま現在、余りに日常的に過ぎて、ものの10年も経てば、綺麗に地上から消える——これが現代という時代である。一旦消えてしまえば、科学史や技術史の記述や、文学作品に登場する一時代前の生活は、その生活用具名と共に単なる記号と化して、どこにも証言者はいない。大きな例をあげよう。地球上いたるところに“歴史”の記憶を喪った民族が存在する。その歴史は僅に他国民の遺した記録にその影をとどめるのみである。その種族は、もはや歴史的時間の上に漂泊する流浪の民でしかない。科学・技術を含めて、文化はその蓄積(歴史)の上に成立っている。その歴史が上述のように単なる記号と化し、また不正確な口伝に存在するだけとなり了ったら、その“漂泊”の中で、一体どこに人類の未来への知恵の源泉を求め、再生への示唆や感動を期待し得ようか。

私は本館が、これまでの成果の保存や利用という、単なる“守成”にとどまるだけでは、学内の要請にさえ応えられなくなると考える。また大学博物館は、学術資料の継承・蒐集、各部門の研究・教育との連携、学術的研究教育活動の場の設定等、その機能を生かすこと、また市民への学術の開放・学習への機会提供等、すべての面で大きな展望をもつべき時が来ていると思う。

“博物館”と言うと、“あれはもう博物館にしかないよ”とか“それは博物館行きだ”と表現されるように、古いものがいっぱいあって、暗くて、陰気で、カビ臭く、長ったらしい解説があってと言うイメージがあり、何となく近寄り難く、ほとんど足が向かなかつたと言うのが正直の所である。しかし、よく考えてみると“博物”と言うのは、動物学、植物学、地学などの総称とあり、“古い”と言うことは直接には関係していない。又、博物館施設の健全な発達をはかるための事で「博物館法」があるが、これに言う博物館は、美術館から動物園、植物園、水族館までも含むもので、“古い”と言うことからは更にかけ離れている感じさえする。にもかかわらず難れ難い“古い”と言うイメージは、身近な博物館にはどうしても古道具を集めたものとか、歴史遺物が陳列されているのが多いことから来る偏見なのかも知れない。

ここ10年来は博物館ブームだそうで、この間に全国では600余館が新しく作られたと言う。その殆どは近代的で、まして科学博物館となると、現代の最先端を行くものさえあり、正に明るく、近代的である。当然このような博物館を見て育った世代の博物館に対して趣くイメージは明るく、近代的と言うことになろう。これは美術館にも当てはまる。従来印象では、教養を高め、精神的啓蒙をはたす場所と、極めてハードに考えられ、建物もそれらしく重々しいのが多かったが、最近では建物の形や構造も明るく、ソフトになって来ているようで、これは美術館に対するイメージの変化を示しているものと言えよう。

ところで、博物館ほど規模の大小のあるものも珍らしい。だが、その存在意義は豊富な知識と理解をもって、方向性が十分に検討された上で作られたものであれば、その規模の大小にかかわらずなく、遺憾なく発揮されるものであろう。事実、地方の小さな博物館でも中央から目を向けさせるようなものもいくらかある。博物館は静なる知的興奮の場で且つ恒常的真理探究の場である。従って、物を陳列して見せると言う点では共通するが、今日の情念の発露、いわば爆発を光り物とする博覧会とは当然性格が異なるべきものである。入場者を多く獲得せんがためにのみ超近代的にしたり、技巧を凝らしたりする必要はさらさらなく、そんなことをすればかえってその使命に反することにさえなる。

最近、西ドイツに1年ほど住む機会があった。日曜日を選ぶに最も適しているのが博物館と気付いたのは残念ながら滞独期間もかなり過ぎてからだった。それからはずっと近く近くの博物館巡りをした。この国の博物館好み

は相当のもので、至る所に大小さまざまな博物館があった。規模の大小にかかわらず、いずれも夫々の特徴がよく出ていて興味深かった。殆どの州はその州内の主な都市に州立の大きな総合博物館を持っていたが、その中には恐竜から絵や彫刻などの美術品の他広告デザインやイラストの類まで極めて広範囲に集めてあるものもあった。そう大きくない博物館でも、場内にカフェやレストランがあり、時々休憩を取りつつ見学できるのが有難かった。しかし、このように博物館が多いと言っても、医学部門に限れば専門博物館は皆無なのは勿論のことで、科学博物館でも医学部門を持つているのは殆どみつけれなかった。科学博物館では世界最大とされるミュンヘンのドイツ博物館ですら僅かに神経連絡の仕組みを示すように点滅する電燈が組み込まれた脳の大きな模型と脳のホルマリン標本があった程度で、他の部門に比べれば等にも等しい面積であった。その他では、原始ハイデルベルグ人の下顎骨のあるハイデルベルグ市内の小さな博物館（プファルツ選帝侯博物館）で、ヘルムホルツが使ったという眼鏡を見た位で、医学部門が博物館入りすることの難しさを改めて知った。ただ私の専門とする法医学に限れば、ハンブルグで犯罪博物館なるものを探し出し、男で出かけて見た。中に入ると、まずハンブルグ市内で起きた殺人事件の珍らしいのが100年前のものから集められていたが、兇器・その他関係物件とか現場写真がずらり並べてあって、殺人手口の彼氏の速いとか、時と共にの移り変りを知る上で興味深く見学した。続いては、本場でのサディズムとかマゾヒズムに使われたさまざまな大道具・小道具類を見てさすがと感心したが、これは序の口で、最後は浮世絵を含む古今東西のポルノの名画・写真に加えてアニメーションフィルムまで集めてあって度肝を抜かれる思いがした。誠に盛り沢山の内容で、規模の割には特色の出すぎるほど出てる博物館とただただ恐れ入るばかりだった。

(医学部教授・博物館運営委員会委員)

熱帯アジアの博物館

山野井 徹

我々の熱帯地域の調査はバリ島から始った。宿に着いたのは夕陽の中であつたので、望朝目にしたヤシの木立をおとして広がる白い砂浜とサング礁の美しさは予想外であつた。しかし、この浜に坐礁し、ひときわ目ざわり(故意に)放置されている軍艦が旧日本軍のものであることを知らされたとき、景観の僅以上に戦争の傷あとを感じた。こうした第一印象をもって始められた調査の期

間中、折をみて様々な博物館を訪れた。インドネシアではバリ博物館、ボゴール植物園付属動物博物館、地質調査所付属地質博物館、軍事博物館、国立博物館、バタビア博物館、美術工芸博物館、陶器博物館、人形博物館。そしてシンガポールでは、国立博物館、南洋大学付属橋本館、貝類博物館。さらにマレーシアでは、ジョージタウン博物館、国立博物館などである。これらのうち、各国の国立博物館を紹介してみたい。

〈インドネシア国立博物館〉

ジャカルタのムルデカ広場の向いにあるこの館は、オランダ統治時代の1862年に建てられたクラシックなものである。駐車料金300ルピア(約100円)、カメラ持込料250ルピアに対し、入館料は50ルピアと安い。展示品は、自

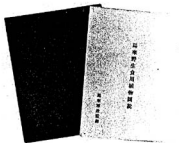


インドネシア国立博物館(ジャカルタ)

然、民族・文化、美術・工芸と多岐にわたって充実している。自然関係では、ジャワ原人が目玉であるが、地球ながらも人類の系統との関係で、わかりやすく配置されていた。またインドネシア諸島の動物相とウォレス線やクウェーバー線との関係が一目でわかる大ジオラマの造力は印象に残る。歴史関係では、旧日本軍の軍刀をはじめとする様々な遺留品が1つのコーナーを占めていた。回廊や中庭には、大小様々な石象彫刻が並べてあった。

〈シンガポール国立博物館〉

イギリスの統治時代の石造りの小じんまりとした建物が使われていた。玄関は車道に面していて駐車場のスペースもない。一応総合博物館ではあるが、展示物の多くは民族・歴史的名のものであり、しかもマレーシアや華僑のそのが多い。一地方博物館的な規模であるが、因の広さを考えれば当然かも知れない。ただ、この館の歴史はそう最近のものでないことは、後日、シンガポール植物園を訪れたときにわかった。シンガポール植物園は以



シンガポール植物園付属図書館で入手した2冊子
(本博物館へ寄贈)

前に一度来たことがあり、私が第三紀の地層から見つけたマキ科のリムノキ属の化石の生きた姿に對面できて感激した場所でもあるが、今回出向いたのは、採集した標本の鑑定の確認と、文献を捜すためであった。付属図書館で文献を閲覧させてもらっていた際、「こんな本在庫がいっぱいあるので、よかったですあげましょう。」ということ、吉びた2冊の冊子がさし出された。見ると日本語で「食用野生動物植物」と「馬来野生食用植物図説」と題する40ページばかりの本である。どちらも「馬來軍政監部」の発行で、編集は「昭南博物館・昭南植物園」とあり、昭和19年1月に発行されたことになっている。昭南とは占領時のシンガポールの名称である。本の内容は学術的価値は低く、出版目的が何であったかは察しがつく。ただ、在庫が多量にあるということから、日本兵の手に渡らずじまいであったものと思える。おそらく、シンガポール博物館の倉庫にもほこりをかぶっていることに違いない。幸いなことに、これはまだ展示されていない。

〈マレーシア国立博物館〉

クアラルンプール空港からの主道に近い旧市内の入口付近の高台に目立つ建物がある。マレー式住宅を模した赤屋根に白壁のこの大建築物は、20年前に建てられたものである。前庭の大噴水、正面の大壁画パネル、そして夜間照明とデモンストレーションの効果は抜群である。内部は冷房がよく効いており、中2階、2階と立体的にフロアーが配置されている。総合博物館ではあるが民族的名のものも多く、しかも舟とか寝台などの大型展示が目立つ。自然分野では化石や岩石・鉱物などもかなりあるが、とくに錫の採鉱から利用に至るまでの過程が、実物、写真、模型、ジオラマなどが使われ、かなりの配慮



マレーシア国立博物館(クアラルンプール)

がされていた。全世界の錫の半分近くをこの国で生産しているとなれば、目玉展示とされるのも当然であろう。同様に、ゴムやヤシ油に関してもかなりのフロアーが使われていた。歴史部門では独立後の展示品が多いが、イギリスの植民地時代の物の後に、旧日本軍の写真、あるいは貨幣の交換の展示に交って、日本軍の軍服などがあつた。この館の印象を1口でいうなら、新興国の意気込みを示すにふさわしい内容・外観である。

以上3つの国の国立博物館に限って紹介したが、一般に魅力ある博物館とは、「物」が豊富なことが第1条件である。そして、そこで選ばれた「物」のいくつかが、適当な「時間」の縦糸に織り込まれているのが展示品ではなからうか。それは金ピカの鏡である必要はなく、むしろ素朴な更紗の味が本物に思える。

一連の見学をおととして、ある一本の横糸を引き出すとすれば、パリの軍艦、ジャカルタの軍刀、シンガポールの扇子、クアラルンプールの軍服、そしてジョージタウンの博物館でみた日本軍の写真などであろう。これらは広島原爆ドームなどに連なる強力な縦糸になるであろう。しかしながら、我が山形大学附属博物館には、まだこの時期のものはないという。どなたか適当な物がありましたらぜひ収集に御協力をいただき、この横糸を当館にもつなげてくださることを願う次第である。この時期を歴史的にしか知らない世代の1人として。

(教養部助教授・博物館運営委員会委員)

田川隕石・飽海隕石

大場 与志男

最近、山形県の隕石について、少し調べたことがある。ごまんじのように、山形県には羅夷な隕石として古い順

に大富隕石(東根市河口、1867.5.24落下、6.51kg)、天童隕鉄(天童市貫津、1910頃発見、12.15kg)、長井隕石(長井市森、1922.5.30落下、1.81kg)がある。最近では1977.5.10小国町に大火球が落ち、隕石探して大さわざをした。これらについては、詳しい記事が他にあるので、ここでは述べない。時々県内のあちこちで隕石らしいものがあらわれるが、ほとんどがニセ物であった。天童隕鉄と長井隕石は、1977年まで日本の隕石のカタログに載っていないかつたもので、一部の人は知られていたが、小国隕石さわぎを機会に日の目をもることになった。

さて、山形県の隕石で、非常に古い西暦839年の田川隕石と、884年の飽海隕石と呼ばれるものが、隕石カタログに載っている。鳥嶽著「隕石の科学」(玉川大学出版部刊、1977)の中に、疑問のものとして断りながらも、落下記録のあるものとして、奈良隕石(764年日本書紀の落下記録)と共に、田川・飽海両隕石が記されている。7月20日頃と7月23日頃と日付まで入っているのでおそらく、1,000年以上前にあつた事件で、「隕石」かどうか疑わしいが、非常に注目されたことは確かである。鳥嶽の著に従って、国史大系から続日本後紀巻八と三代実録巻四十六で、両隕石(?)の記述部分を当ててみた。全文は記せないが次のようである。仁明天皇(承和六年十月=西暦839年10月)乙丑。出羽国言。去八月廿九日菅田郡司解称。此郡西浜津。府之程五十里。本自無石。而從今月三日。霖雨無止。雷電聞。聲。經二十余日。乃見晴天。時向海畔。自然隕石。其數不少。或似。或似鋒。或白或黑。或青或赤。凡(凡)厥(其)状。鋭皆向西。甚則向東。……(一部略字使用)。

……としたところに隕石の文字がみえる。もっともこれは、石が落下したことを意味するもので、いわゆる「隕石」を意味する語ではない。光孝天皇(元慶八年九月一十月=西暦884年7月)にも、「出羽国司言。今年七月二日……」と飽海郡の海岸に同じような物体の落下を記している。

果して、この2度にわたる、庄内海岸での落下物は「隕石」であつたのだろうか。この点に関して、鳥海山の噴火史と比較し、火山放出物説をとっているのは、東北学院大学の村山啓氏である。この頃、鳥海山は活動期にあり、西暦804-806年、810-833年、871-883年、915-939年に盛んに噴火をくりかえしていたらしい(理科年表による)。村山説では、鳥海山の噴火によって、ペレーの火山山ガラスでできた水鏡状の放出物が降つたであろうと考えている。

人類遺跡の矢じり説は、柏倉亮吉監修、山形県社会科学研究会編「山形の歴史ものがたり」(日本標準社刊、1981)の最初に紹介され「矢じりが降って来た」に物語られている。石器が天から降って来たとは、不思議な話ではある。常識的に考えても、このようなことはあり得ないし、古

記録にある形態・色なども“隕石”らしくない。土中に埋没していた石器が、大雨で海岸まで洗い出されたのであれば、その後もしばしば生じてよい事件である。多数が落下することは、隕石雨と呼ばれ稀ではないが、色が様々であるような例はない。筆者は、今ここに、テクタイト説を新たにあげて、このミステリーの紹介を終えたい。テクタイトとは、普通の“隕石”と異質で、硫酸分の多い、十勝石に似た黒色・暗緑色のガラスである。未だ地上発生（火山）説と、天体説があって決着がつかない不思議な物体で、世界各地で、ある限られた地域に集中して発見される。オーストラリア、フィリピン、ドイツ、北アメリカなど全く火山のない地域にも発見される。その性質はほぼ一様で、空中を高速で飛来して来たらしい証拠もある。地球外から来たとして、月面説、彗星説、などさまざまである。地質時代では新第三紀層中に集中するがオーストラリアのものはごく新らしい。しかし、1913年にカナダ・北米で多くの観測がされた、シリライト・シャワーは、地球を約90分で一周する流星群であった。テクタイト落下の現代版と言われている。もともと単一の物体であったが、橋本軌道で地球の周囲を公転するうち、近地点で空気との摩擦で物体が溶けはじめ、滴となって地上に落下したと考えられた。田川・鮎海の隕石が今日入手できない限り、ナゾは解けそうもない。

(理学部助教・博物館運営委員会員)

資料紹介

書讀 佐藤祐豪 書 演詩(額装)

中 沢 勝 麿

前号までは、旧蔵資料について紹介を行ってきたが、今回は最近受け入れた資料について紹介しようと思う。それは、本県出身の書家佐藤祐豪氏の作品である。

氏は現在、東京に在住し、日展評議員、日本書道院理事会長、全日本書道連盟総務等の役職につき書道界の指導者として活躍しておられる方である。氏の本名は祐五郎で、初め“示右”の号を用いていたが昭和25年以後は、“祐豪”と称した。明治38年(1905)山形県西村山郡朝日町和合に生まれ、幼時から書道に親しみ大正14年(1926)数え年21歳で上京し、当時山形県籍岡出身で中央書壇で活躍していた、吉田苞竹(明治23年～昭和15年)の門に入って指導を受け、六朝風の書法を極め、さらに中国の伝統美を超えて、日本の漢字の造形を創り出した独創性豊かな感覚を持つ書家である。

昭和7年(1937)東方書道会第一回展に出品してから毎回受賞、第六回、第七回と連続最高賞を受け、東方書道会の特別会員、理事審査員となり、日展にも出品して入選・入賞している。昭和28年(1953)第九回出品作品は文部省賞上げとなり、第十回展無鑑査、第十二回展からは依頼作家となった。なお、日展審査員も西回勤めている。

氏は愛郷心が強く、自作々品を郷土に残したいとの考えから、昭和24年(1949)第五回日展に出品し、入選となった“白楽天詩 長恨歌”(楮書・六曲屏風)を本館に寄贈された。氏は今年喜寿を迎えられ、これを記念してこれまでの作品をまとめ、“佐藤祐豪作品集”を出版されたが、その中には本館に寄贈された前記“長恨歌”の書も掲載されている。氏は昭和20年3月9日、10日の大空襲で今まで収集した法帖や作品等はほとんど焼失されたそうだが、本館に寄贈された作品が現在まで無事保管されていたのを非常に喜ばれ、最近の作品を再び寄贈して下さることを快諾され、今回の寄贈となったのである。

その作品は、晩唐の詩人“杜牧”(803～853)の“山行”と題する下記の詩を隷書で書いたもので、昭和51年(1976)第八回日展出品作品である。結体が遼廓古樸で、運筆が峻拔雄渾一種清高の気を感じている作品である。

霜 停 白 遠
 驚 車 雲 上
 紅 坐 生 寒
 於 愛 處 山
 二 楓 有 石
 月 林 入 遠
 花 晚 家 斜

寄贈を受けた祐豪氏の作品は、本館に所蔵展示され、本学々生の教育と研究に資されると共に、一般にも公開し鑑賞と研究に供している。

なお、この度の作品の寄贈に仲介の労をとって下さったのは、山形市蔵王飯田にお住いの祐豪氏の実弟である佐藤七牛氏であったことを記し、感謝の意を表したい。



お 知 ら せ

1. 公開講座について

昭和57年度山形大学公開講座として、博物館では昨年度の「生活とエネルギー」に引き続き、「博物館に学ぶ」というテーマで公開講座を開催することになりました。

今年では本館が「博物館に相当する施設」として国の指定を受け（昭和27年）産ぶ声をあげてから、ちょうど30周年にあたることから、これを機会に山形大学附属博物館というもの、そして本館で所蔵している資料の研究成果をはじめ、「博物館」での学び方、「博物館」の楽しみ方など、いろいろな角度から新しい「博物館」の利用の仕方を受講者の方々と考えてゆきます。

なお、開催要項は下記のとおりです。

- 1) 名 称／昭和57年度山形大学公開講座「博物館に学ぶ」
- 2) 会 場／山形大学附属図書館会議室
- 3) 期 間／昭和57年9月11日(土)～昭和57年10月16日(土)までの毎週土曜日、計6回
(午後1時30分から5時30分まで)
- 4) 受講者の種類・人員／一般市民100名
- 5) 講師の氏名・講義科目・時間割

講 師 及 び 講 義 科 目

日 時	講 義 科 目	時 間	注 意 事 項	教 員
第 1 回	開 講 式	計 30		
9月11日	博物館資料から学ぶもの	120	山形大学附属博物館学芸員 中 村 武 雄	
	図書館の生物とその歴史	〃	山形大学附属人文学部 川 崎 武 雄	
第 2 回	鶴立と自然環境 —山形地方を例として—	〃	山形大学附属教育課 藤 田 一 郎	
9月18日	「日本書文化」と山形	〃	山形大学教育課 藤 田 一 郎	
第 3 回	紅葉とその歴史	〃	山形大学工学部理工 高 橋 隆 博	
9月25日	日本海の動物相	〃	山形大学名誉教授 藤 本 佳 一 郎	
第 4 回	外国の博物館を訪れて	〃	山形大学附属教育学部 土 屋 浩 司	
10月2日	日本のスズ	〃	山形大学附属教育学部 藤 本 佳 一 郎	
第 5 回	博物館の楽しみ方 —全国の博物館を対象にして—	〃	山形大学附属教育学部 藤 本 佳 一 郎	
10月9日	東京博物館取組のオリンピア展 —エルギン・マーズルズ—	〃	山形大学附属人文学部 川 崎 武 雄	
第 6 回	松島海保と山形の考古学	〃	山形県立山形南高等学校 藤 田 一 郎	
10月16日	博物館に学ぶ	〃	山形大学附属人文学部 川 崎 武 雄	
	終 了 式	30		

なお、講師の都合により講義科目の順序が入れ替わりの場合があります。

2. 特別展について

前述のとおり30周年を記念して本館の「収蔵資料展」を開催することになりました。

- 1) 期 間／昭和57年10月20日(土)～30日(土)までの10日間
- 2) 会 場／山形大学附属図書館会議室及び博物館展示室
- 3) 展示構想／展示室が手狭なため、館内に展示できず収蔵室に保管している資料、最近寄贈を受けたり、購入によって新しく本館の所蔵するところとなった資料等、常設展示では見学者の目に触れることのない資料も一挙に展示・公開し、また、常設展示の一部にも新たに手を加え系統的なものとして特別展示を行う予定です。

なお、展示する資料の内容等については、目下具体的な案を検討中です。

3. 学芸員資格取得のための博物館実務実習について
今年度の実務実習の希望者数は下記(表)のとおりです。

学 部	希 望 者 数	合 計
人 文 学 部	16人	35人
教 育 学 部	4	
理 学 部	15	

昭和56年度見学者総数

一 般 成 人	個 人	611 (人)
	団 体	36
大 学 生	個 人	323
	団 体	110
児 童 生 徒	個 人	17
	団 体	97
合 計	個 人	951
	団 体	243
	総 数	1,194

山形大学附属博物館報 No.9

1982.7.1発行

編集発行人 山形大学附属博物館
(〒990) 山形県小白川町1丁目4-12